慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	我邦海港の史的研究（博多と堺）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.11 (1917. 11) ,p.1450(56)- 1461(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19171101-0056
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19171101-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我邦海港の史的研究（博多と堺）

阿部秀助

一

我邦上古の歴史は一面から見れば移住の歴史である、而して當時に於ける理想の移住地なるものは論者の推定する處では、多くの場合を通じて、河川の附近で、同時に淺海部即ち「潟」に沿ふた浦地である、斯く河川の附近であつたことは普通の場合に見るが如く交通上農業上の意義で、淺海部即ち「潟」に沿ふを必要としたことは、當時、移住民にとつて殆んど主食物の觀を呈してゐた魚介類が漁業の幼稚な結果として淺海部にあらずんば之れを捕獲することが甚だ、困難であつたことゝ同時に是等の地方が理想的の鹽田であつたことの二點に歸着すると思ふ、何んとなれば、海岸が遠淺であることゝ、其附近に河口があることゝ、激浪怒濤の患なきことゝ、地層面が潮水干滿の平均線に存することは鹽田其者にとつては欠ぐ可からざる資格である、而して海鹽が、上古の國民生活にとつて必要な食料品であつたことは之れを以て自己の主要な財産とせしものありしを以て證明することが出來る、即ち仲哀紀に

八年春正月巳卯朔壬午幸二筑紫一、時岡縣主祖熊鰐聞二天皇車駕一、豫拔二取百枝賢木一、以立二九尋之船一、而上二枝掛白銅鏡一、中枝掛二十握劒一、下枝掛二八尺瓊一、參二迎于周芳沙歴之浦一、而献二魚鹽（ナシホヂ）地一、因以奏言自二穴門一至二向津野大濟一爲二東門一、以名籠屋大濟一爲二西門一、限二沒利島阿閇島一爲二御筥一、割二柴島一爲二御甌一以逆見海一爲二鹽地一云々

とある如く、岡ノ縣主熊鰐が自己の忠節を誓ふ爲めに魚鹽地を献じた一事は、明かに魚鹽地なるものが當時、彼れにとつて最も貴重な財産であつたことを明かにするものである、又、以上の記事中にある「名籠屋」は伊藤常足が太宰管内志の中に「名籠は魚籠（ナゴ）の意か又は魚木屋（ナゴヤ）にてもあるか」と云つた如く、獲得した魚類に關する納屋の所在地で今の筑前遠賀郡若松市の北一里の岬附近に存したものと思ふ、斯くて是等の魚類と海鹽とは此地方の産物として、專ら遠賀川流域地方に分

布せられたのである、更に轉じて西に向へば海神國なるものがある、而して此の國の主な中心點は筑前糟屋郡の志賀、新宮方面にあつたように思はれる、即ち現時の志賀島は延喜式の志賀、和名抄の志加で、此島に鎮坐せる志加海神三坐は阿曇連の祖神で、此阿曇連は應神天皇紀に「十一月(三年)處處海人訕詫之不從命、則遣阿曇連祖大濱宿禰平其訕詫」因爲海人之宰」とあるにても、其勢力の程を察することが出來るのである、而して斯くの如き政治的勢力を發生せし經濟的意義に就きて考ふるに此方面では多少農産物の獲得に務めたものなきにしもあらずであるが、其努力の多くは宗像及八女山門の勢力に妨げられて大なる陸上發展をなし得なかつた結果として此方面の重な職業が海産物の獲得、殊に海鹽であつたと考えらるゝのは萬葉集第三卷石川少郎の歌に「然之海人者軍布苅鹽燒無暇髮梳乃小櫛取片不見久爾」又、同集第七卷羇旅の部に「之加乃白水郎之燒鹽烟風乎疾立者不上山爾輕引」尙ほ同集第十七卷平群氏女郎が大伴宿禰家持に贈つた歌に「牡鹿海部乃火氣燒立而燎鹽乃辛戀毛吾爲鴨」にあるが如く、製鹽事業は遠き以前から營まれてゐたことゝ思ふ、其他、海人としての志賀の浦人に就いては、同じく萬葉集第十二卷作者不明の中に「思香乃白水郎乃釣爲燭有射去火之髣髴妹手將見因毛歟得」又、同七卷に「四可能白水郎乃釣船之綱不堪情念而出而來家里」等あり、更に志賀に海人多く住してゐたことを證するものは、香稚、志賀兩神社に存する祭典の古式である、例者、香稚宮では志賀白水郎風俗樂を奏するのが定式となつてゐる、即三代實錄第二十八卷に「貞觀十八年春正月二十五日癸卯、先是貞觀十六年太宰府言、香稚廟宮每年春秋祭日、志賀島白水郎男十人女十人奏風俗樂所著衣冠、去寶龜十一年、大貳正四位上佐伯宿禰今毛人所造也、年代久遠、不中服用、請以府庫物造充之、至是大政官處分依請焉」とあり、其他、二月六日の祭には、同じく志賀白水郎が海藻介蟲を獻ずることになつてゐる、但、後世には志賀の禰宜坐の社人が海藻を調物として奉つたようである、又、志賀明神にても二月十五日に獵漁の式がある、更に神功紀などにも「遣磯鹿海人名草」而令視、數日還之日、西北有山、帶雲橫絙、蓋有國乎、爰卜吉日而臨發有日云々」等の記事が見えてゐるのである、要するに、海神國に於て主要な地位を有してゐた志賀及其附近の經濟的富力は主として海産物殊に海鹽であつたと思ふ、而して料理法の幼稚であつた上古に於て生要な食物である魚介類(香稚の祭に箱崎の海人が蝦七十五、

蛸（ハマグリ）七十五、蛸七十五を献ずるのが常例となつた如きは魏志の「今倭人好沈没捕魚蛤」と併せ考へて當時海人の捕獲せし魚介の如何なるものであつたかを知ることが出來る）及野菜類（論者の推定する處では、今日、世人が朝食の際に主として用ゆる菜漬は其實古代では主要食物であつたものが料理法の發達につれて、漸次淘汰されて、今日では僅かに朝食の際に其名殘を留めたものと思ふ）に對して今日よりも多くの鹽を必要とせしことゝ思ふ、然し志賀及其附近の地が如何に多くの海産物を産すとしても、如何に多くの海鹽を産出するとしても此地方の住民は單に海産物殊に海鹽のみで日常の生活を維持することは不可能である、必ずや多少の農産物を攝取する必要がある、然るに此地方は山及沙地のみで殊に當時の農業經營上必要な用水が缺乏してゐた結果殆んど農産物を産しなかつたと思ふ、故に彼等の日常生活上の慾望を充たす爲めには、勢ひ自己消費以上に餘裕ある海産物を與えて缺乏を感じてゐる農産物の供給を受くる必要がある、而して當時海神國の勢力範圍で比較的農産物の豐富であつたと思はるゝのは對岸、那珂川の流域地方である、斯くて是等の地方に於ける農産物を以て對岸志賀方面の海産物と交換するに至つたのである、而して以上交換の中心となつたものは那珂に於ける住吉社であつたと思ふ、現に筑前續風土記春吉村の祭に「昔住吉九月の祭の時は、月の初より末迄交易をなしける、市場成し故に人多く集り云々」とあるのは、明かに古代の慣習が保存せられてゐたのである、蓋、神社の境内又たは其附近の地が市場となることは史上決して珍らしき事實ではない、例者、古代羅馬に於ける「アヴェンチン」丘の「ヂアナ」殿堂の如き、或は「エトルリヤ」の「フェルニア」の如き何れも神社の附近に市場の發達した例證である、而して住吉社を中心として發達した市場取引が多く農産物の如き或は海産物殊に海鹽の如き大量的のものであつたことは自から對岸志賀方面との交通上海上を利用することゝなり、之れが地方的海上交通の頻繁なるにつれて「津」の發達するに至ることは極めて自然的である、殊に此方面に「津」の成立することは彼の仲哀紀に「皇后別船自洞海入之潮涸不得進、時熊鰐更還之自洞奉迎皇后則見御船不進、惶懼之忽作魚沼鳥池悉聚魚鳥皇后看是魚鳥之遊而忿心稍解及潮滿即泊于岡津」にある岡津の場合と同じく海岸が遠淺で通航の船舶が時として潮時を俟つ必要があつたことに歸因すると思ふ、又、農産物其他食料品の輸出入口たる

ことを推定することによつて宣化紀にある

食者天下之本也、黃金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷、夫筑紫國者遐邇之所朝屆去來之所關門、是以海表之國候海水以來賓望天雲而奉貢自胎中之帝洎于朕身收藏穀稼蓄積儲粮遙設凶年厚饗良客安國之方更無迄此、故朕遣阿蘇仍君加運河內國茨田郡屯倉之穀蘇我大臣、稻目宿禰宣遣尾張連運尾張屯倉之穀物部大連、麁鹿火宣遣新家連運新家屯倉之穀阿倍臣宣遣伊賀臣運伊賀國屯倉之穀脩造宮家那津之口云々」

以上の記事を理解することが出來ると思ふ、換言すれば博多の舊名稱であつた那津は宣化以前に於て既に穀物を集積するに足る設備を有してゐたのである、次ぎに那津と博多との名稱であるが、先づ第一の那津は那珂の津ではなく廣義の「魚津」であつたと思ふ、更に第二の博多であるが論者の考ふる處では、今日の「博多」はHacataと呼んでゐるが、今を去る三百年前に基督教徒が歐洲方面に報告したものゝ中にはFacataとなつてゐる、例者、西暦千六百四年の「ゼズイット」教徒の布教書翰の如きは其一つである、而して論者は博多の原音はPaccataであつたと思ふ、Cataは宗像Muna-cataのCataを同樣に「潟」又は「津」を意味すると思ふ、次ぎに古代朝鮮語で「瓢」のことをPakと稱するのであるが、此點に就いて注意す可きことは東國通鑑の「新羅脫解王、二年春正月、以瓠公爲大輔」と三國史記の「瓠公未詳其族姓、本倭人、初以瓠繫腰、渡海而來、故稱瓠公」とである、論者の推考する處では「博多」は以上新羅で有名な傳奇的人物である瓠公の津又たは瓠を腰にする倭人の津と云ふ意義で、其名稱は專ら新羅方面から自余の韓國及支那方面に波及し、新羅人及其他の外國人が來るにつれて、漸次彼等の稱呼が古き那津に對して新しき名稱となつたと思ふ、即ち「那津」と「博多」との關係は、丁度希臘人が自國人をHellenenと云つたのに對して、當時、以太利に住んでゐた同族が希臘人をGraeciと云つた如きもので、那津は本邦人が命名せしもの、博多は同津に對して外國人の名けたものであると思ふ。

之れを要するに那津即ち博多の成立初期は所謂地方的の意義を有したもので、其間、魚類、鹽類は農產物の輸送が重要な意義を有してゐたことは誰人も否定するを得ぬことゝ思ふ。

二

我邦の都市中、一種獨特の發達を有した堺に於ける企業的資本が其根柢に於て果して如何なる要素から成立するに至つたかは本邦經濟史にとつて興味ある研究である、論者の推考する處では、初期に於て之れが著しき所因となつたものが三つある其第一はの堺の位置が攝、河、泉三國の要衝に當つてゐると共に紀州、大和兩方面に通じ、殊に堺の Hinterland では消費能力の發達せる人口が緻密であつたことは物資の供給地として堺を盛んならしめたものである、而して之れが第二の源因は、我國民にとつて主要な食料品である魚類が其沿海に於て豐富であつたことである、例者、堺鑑土產の條に「住吉明神の社の御前の海邊より寄來魚を前魚と云、又其一說には西宮戎の御前の海邊より寄來と云共、申傳り時節は三月より六月までの事也と云ふ、歌枕に爲家御歌にゆく春の堺の浦のさくら鯛あかぬがたみにけふや引らんと讀たれば鯛許に限樣なれ共、總じて當浦の魚を前魚と云ふ」とあるが如きは其一端を示せるもので、只だ以上の如き一定の時期に限られた魚類をして出來丈け其市價を維持し、且つ之れが販路を擴張する爲めには、其魚類の保存時期を長くするの必要がある、茲に鹽魚の問題を發生するのである、而して海鹽と本地方との間に極めて古くから關係の存すると思はれる事實は此地方で最も古き歷史を有してゐる三村大明神である堺鑑神廟の部によれば「鎭守三村大明神は舊事本記云、かけまくも忝も天神七代伊弉諾尊の御子として、日向國小戸の鹽瀨にて御誕生在て、其後葦原瑞森に移住玉ふ事無量歲也、御神號を事勝食勝國長尊（コトカツクカツクニナガサノミコト）と申奉る鹽梅の事を司どり玉ふに依て鹽津老翁とも名付奉る」とあり、更に第二の傍證となるのは泉州志の左の記事である。

堺ノ津

余按古書鹽穴郷土師郷ノ下條ノ諸村也

北ノ莊（北ノ半町、旅籠町、綾ノ町、錦ノ町、柳ノ町、九間町、神明町、宿屋町、材木町、車ノ町、櫛屋町、戎ノ町、湯屋町）

余按、舊土師ノ郷ノ下條也、今日北莊

昔鹽穴郷

南莊（市ノ町、甲斐ノ町、大町、宿屋町、中ノ町、寺地町、小林寺町、新在家町、旅籠町、南ノ半町）

論者は勿論、土師鹽穴兩郷を以上の如く嚴密に規定するものではないが、然かも以

上の兩郷が相併んで存在してゐたことは、やがて、同地方が一箇の製鹽地であつたことを證明するものである、蓋、古代に於ける我製鹽業は極めて幼稚なもので、多分毛細管引力で漸次旺騰した海水が太陽と風力との作用で其中の水分が蒸發して鹽分のみ細砂中に殘留するものを溶解して濃厚鹹水としたのか、或は現時大島地方の最も幼稚な鹽業に見る如く、簡略な器具で煮沸して萬葉の所謂「片鹽」の如きものを製造したのか何れにしても或土器を必要としたことゝ思ふ、而して此事實は鹽穴郷に土師郷の對立した、所以であると思ふ勿論土師氏は垂仁紀にあるが如く堺地方に移住したのは應神、仁德等の山陵營造の爲めに移住したも然かも同地方に於ける特殊な經濟事情が彼等をして漸次職業の轉化を發生せしめたとするのは必ずしも輕卒な斷案でないと思ふ、彼の堺鑑土產の條に「今の壺鹽屋先祖は昔年は藤九郎とて猿丸太夫の末孫と云へり、花洛上鳴畠林村の人也しに、天文年間に當津湊村に來、住居してより以來、紀州雜賀鹽を求め土壺に入て燒返、諸國へ商賣して壺屋藤丸郎と號し世に廣用故に今に至迄其子孫相續す」とあるのは後世になつて其販路の擴張の結果、此地方の生產額では不充分である結果他より供給を仰いだものと思はれるのである、要するに魚類を永續的に貯藏するには之れを鹽漬にすることによつて大量的に貯藏し得る、而して大量的に貯藏し得ることは更に納屋の必要を促すことになる、斯くて納屋の成立以後は之れによつて非常な富が集積せられたことは、尙ほ十七世紀の和蘭の富が「ヘリング」及 Pickelhering に負ふ處大なりしが如きである、故に堺の經濟的起源に就いて考察する時は明かに其處に海鹽其者の主要な意義を認むることが出來るのである。

要するに博多と、堺とは共に之れが發達の起源に於ては一種の「魚津」であつたと思ふ、只だ此魚津の經濟的意義をして大ならしめたものは魚類が一般國民の常用品であつたことゝ海鹽による鮮魚の加工作用である、此加工作用は永久的に生產過超の弊を防ぐと共に、一面に於ては遠距離の地に之れが販路を求め得る結果、之れによりて齎らされた利益は決して少くなかつたことゝ考察せらるゝのである、而して此利益は或意味に於て兩者の對外的活動上に於ける企業資本の一部を構成するに至つたものと信ずるのである。